Not for under 18years.

FUNKY ANIMAL THE SUPER

FUNKY ANIMAL THE SUPER

Not for under 18 years.

FUNKY ANIMAL THE SUPER 目次




VAMPIRE SAVIOR
蒼八
桐生


ごめんない…
エミリー…


エ…
エミリーン!
ずるる…

・デニキ…

ぬあ～!!

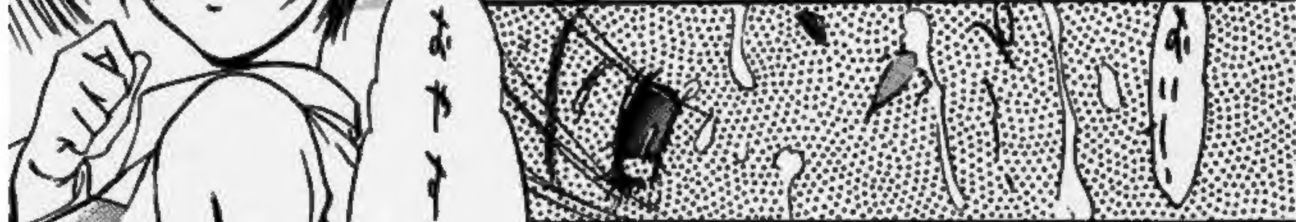
……ぐ

なん～

おっき～くなっ…!

あっ

…き…し…ル…


あはあー
おやすみ…なさい
楽しかったわ…
END


つる&たにがて
すまん
TSUYOSHI
97.8


りんごとはちみつ
♪トロ〜りとけてる♪
カンゲキだアッ!!!
TSUYOSHI 97.8

ぜー
ぜー
ぜー…

もう…
力が出ねえ!

このままじゃ…

殺られるっ!!

ぷるんっ

蜂女のキス




こ…このアマァ〜!!
アン!
アッ♡


俺が身動きできないのをいいことに――

もてあそぶつもりかっ!?
ーア!
ハァァンッ!!
アアン!!


オッ?


…ナメ
ヤがって!
ペロッ


―だが
時間がたてば
俺の体力は
復活する!
ンむぅ…
ン…
その時こそ――


あぉん!?
ブッ飛ばして
やるぜっ!!
キャアン♡


今のうちにいい気になっておけ！
すぐに後悔させてやる!!


タップリとな!!



早いだけだったりして♪







交尾のあとオスを食べちゃうんだってさ♡

茶木紀え


15
ユナイト双児



あっはっ
あはぁっ
ぬちゃっ
ぐちゃっ
んはぁっ
ずるっ
ちゅぐうっ



やッ熱ッッ！
ああン！
ずるぅっ
びゅっ
ずびゅっ
びゅぷっ
びゅるぅっ

怪物さん対デミトリさん
濡れぬれ魔界大作戦

描いた人 ねりわさび♡



ふっ、それは聞けんなぁ…

いけませんね サリー

このデミトリ様に刃向かった者がどうなるか……

ちゅむっ

たっぷりと教えてやらねばいかんからなぁっ!!

ずっ

ひっ いっひいっ

びくんっ

ずぷーーっ

!

ぬぷるっ

んっひっ!
ぷびゅっ
ぶるっ
きひっ…
やぁっ
痛ぁっ
いひっ
りゅぶっ
ぶりゅうっ



やっ！はっ…
ああっ…！
ぶぴょるっ
るぷっ
ぶるっ
ぬぶーうっ


だぷっ
ずるっ
あはっ…
もう…お尻があっ！


ふぅんっ…
くうっ!
びゅうーっ
びゅるるっ
びゅるるっ
ずびゅうっ
どぷっ


あっ…
びゅぷっ
づぴゅうっ

ちゃぷっ
はあっ
ぴちゃっ
んっ…
ふんっ
こくっ ごくんっ
びゅっ
びゅるぅっ




VS
PREDATOR



きえてしまった もうひとりのわたしへ

小説：美月ひな　原絵：水原賢治

いつも退屈だった。
魔界を統一した今でも。
あたし、モリガン・アーンスランドにとっては勝利はすでにあたりまえのものとなっていて、ありがたみがわかなくなっていたのだ。
だから、せめて人間の間を回って退屈をまぎらわすしかなくなっていた。
お父様の生きていたあのころのように

その日は妙に赤みがかった満月の夜だった。
いつものように退屈をまぎらわせて帰る途中のあたしは、ふっ、と妙な気配がすることに気がついた。
わたしと同質の気配に。
その気配は、不意に形をとって眼の前に現れた。
ショートカットの、妖魔として。
わたしよりも少し背は小さいか。胸も、ない。わたしと違う、可憐な美しさを持っている娘だった。
かすかに、肌からいい香りがする。
欲望をそそるような香りだった。
「誰だ、おまえは？」
思わずきいたが、その娘は、それには答えず、
「遊びましょうよ」
と不敵なことを言った。
ふふん。
生意気な。
そう思わずにはいられない。
身のほど知らずにもほどがあるというものだ。このわたし、魔界の女王たるモリガン・アーンスランドに挑んでくるとは。
に、しても。
わたしは心の中でくびをかしげた。
この娘は誰だろう？
そう思わずにはいられない。
わたしの記憶にはない顔だし、まったく気にかけないでいたにしてはなかなか強い力を持っているみたいだった。

いや、まあ、いいか。
わたしは首を横に振った。
どうせ、すぐに消える相手だから。
ぺろり、と、自分の右の人差し指をなめた。
戦う前のわたしのくせだ。
そうしてから、あらためて相手の方を見た。構えは、とらない。第一、わたしくらい反応速度が早いと構えなど不要なのだ。
が、今夜のわたしは、ひとつだけ誤算をした。
相手も、同じくらい速かったのだ。
ふっ、と相手の姿が消えたような気がした。
次の瞬間、わたしの額めがけて拳が突き出された。
反射的に、相手の腕を取る。
が、それが、攻撃の意思を持たない腕だ、というのはすぐにわかった。
「しまった!」
叫ぶ暇もない。
相手の体が、後ろに飛んだ。
なまじ力を入れて腕を掴んでいたから、わたしの体もひっぱられた。
自分で自分のバランスを崩したようなものだ。
あっという間に、とりかえしのつかないほどバランスがくずれていた。
そして。
「シャイニング・ブレイド!」
相手の声が聞こえた・・・ような気がしたときには、すでにわたしの意識は吹き飛んでいた。
なぜ?
なぜわたしと同じ技を?
意識がなくなる直前にそんなことを考えたような気がした・・・
かすかに黴くさい貧弱なベッドの上で、ゆっくりと意識が回復した。
体に、なにも身につけていない。が、これはわたしを裸にするため、というよりも、わたしを護るコウモリを追い出したに違いない。
目の前に、わたしを倒した相手がいる。
わたしを眺めていたらしい。

だが、なんのために？

まさかわたしに見とれていた、とは、さすがのわたしのこのときにはまったく予想もしなかった。

わたしの連れ込まれた部屋は、あまり広いとはいえない部屋だった。ベッドの他には、椅子と、小さなテーブルが一つ。だが、どれもそれなりに趣味のいいものだった。

力のある妖魔なら住居の広さなどは好きに選べるから、小さい部屋は彼女の趣味なのに違いない。

と、すると、それなりに寂しい思いをしている妖魔なのだろう。そして、権力欲のあまりないタイプだ。

魔界での地位を狙ってわたしを襲った、というわけでもなさそうだった。

では、なぜ？

わたしは、ゆっくりと相手に眼を向けた。

にっこりと、相手が微笑んだ。

わたしに勝った余裕の笑みか？

一瞬そう思った。が、どうもそうではないらしい。わたしといるのが嬉しい、という感じの笑顔だった。

なんといえばいいのか、判断しづらい相手だった。

と、

ひょいっ、という感じで、相手がわたしの上にのしかかってきた。両手首をがっちりと握られてしまっていた。

はねのけようとしたが、ぴくとも動かない。

そのときになって――いままで気がつかなかったのが信じられないが――わたしは、すっかり魔力がなくなって人間のようになっている自分に気がついた。

薬でも打たれたのだろう。

卑怯な。

心の中に怒りがわいてくる。

こいつが誰だろうと、

かならず殺してやる。

その娘は、わたしの体の上にのしかかったまま、唇をあわせてきた。

息が、甘く香る。

魔力を失っているわたしにとっては致命的にもなりかねない欲望の香りだ。わたしもさんざん相手に使った魔界の香り。

人間の欲望を最大に引き出す香りだった。
このままじゃ、いけない。
相手の唇を、思いきり、噛んだ。
食いちぎろう、と思ったのに、かすかに血が出ただけでおさまった。
ふん、つまらない。
睨みつけたが、相手にはまったく効果がない。相変わらず楽しそうな顔をしている。
魔力さえあれば。
悔しさに自分の唇を噛んだとき、相手が、不意に、わたしの手首を握った手に力をこめた。
骨が、砕けるかと思った。
「・・・・」
全身に、汗が吹き出した。
このまま本気で両手首を握られたら、恐らく砕けてしまうだろう。魔力がなくなると、体の強さも人間と同じくらいになるらしい。
人間と同じくらい！
なんの力もない、という意味ね。
魔界の女王ともあろうものがなさけない。
勝ちすぎて奢っていたか。知らない相手に油断するとはね。
相手の顔を見ると、いかにも、「自分を受け入れろ」という顔をしている。けど。
そんなことを認めるわけにはいかない。たとえ骨を砕かれても、プライドを砕かれるわけにはいかない。
ぷいっ、と横を向くと。
相手がため息をつくのを感じた。どうやら、わたしの気持ちがわかったようだった。が。
わたしは、自分がまだ相手を甘く見ていた、というのを思い知らされたのだった。
ふうっ、と。
甘くかぐわしい息が、わたしの顔に吹きかけられた。
強情な人間を相手に、わたしが過去何回も——わたしの魅力に対抗する人間はほとんどいなかったから数えるほどだが——使った手だ。
妖魔の息は最高の媚薬にまさる。
頭の芯が、くらくらした。

目の前に迫ってくる唇が、あまりにも魅力的に見えた。
柔らかい唇が、わたしの唇を覆う。
「ん・・・」
思わず、甘い声が出た。
どんなに抵抗しても、抑えようがない快楽が体の芯から湧きだしてくる。
このまま、楽しんでしまおうかしら。
そうも思った。
どちらにしても、わたしをいつまでも自由にすることはできないし、第一相手にその意思があるとも思えない。
楽しみたいなら、そうすればいい。こういう楽しみも良いじゃない。
けど。
わたしが主導権を握っていないのは嫌だ。
心が、そう言って抵抗する。
ああ、でも。
こうやって抵抗も出来ずに唇を奪われる感触のなんと気持ちのいいことか。
いままでわたしの知らなかった楽しみであることは確かだった。
相手の唇が、わたしの唇から離れた。
舌の先が、首筋に触れた。
ぞくぞくっ、と。
電流のように快楽が走った。
声がもれないように、必死で唇を噛みしめた。
こんな小娘を相手に快楽のあえぎを漏らすのがどうしても嫌だった。
どうしてこんなに意地になるのか、自分でもわからない。
首筋を這っていた舌が、だんだんと胸の方に下りてくる。
舌が動くたびに、気が遠くなるほど気持ちいい。
そして。
相手の舌が、乳首の先をぺろり、となめた。
「ああっ・・・」
なんていうのか。
こんな快楽もあったのか、と思う。
人間の男に、体を自由にさせてやったこともある。が、人間の男には、こんな快楽を与える能力はなかった。

こうやって体を蹂躙されるのは、そんなに悪いものじゃない。
心のどこかがささやく。
この楽しみを、できるだけ味わおう、と。
指が、下半身へとのびてきた。
そこはもうすっかり濡れていて、相手の指をするり、と受け入れた。
ちょっと強引に、体の中で指が動いた。
その感触がもうたまらなく気持ちがよくて、わたしは両手で顔を覆った。
快楽にあえぐ顔を見せないために。
体がかあっ、と熱くなって。
覚めた部分が、快楽の前に膝を屈してしまった。
「ふ・・・ああっ！」
頭の中に白い光がちかちかとはじけるような気がした。
全身の力が、甘く抜けていく。
もはや抵抗する気もなくなって、ただあえぐだけの人形になりはてようとしたとき。
「わたしのこと、好きだって言ってよ」
耳元で、声がした。
わたしのこと、好きだって言ってよ。
その言葉に、わたしは聞き覚えがあった。
そう。
その言葉は、かつて、わたしが言った言葉ではないのか。誰も愛してくれる人のいない冷たい城の中で、鏡に向かって言った言葉。
眠れぬ夜を過ごすたびに鏡の中の自分にキスをしながら呟いた言葉。
誰も愛してくれない。お父様でさえ、わたしの力以外には興味を示さず、執事はただ仕事としてわたしに従っている。そういったことに耐えられず、妖魔にあるまじきことに愛を求めた幼いわたし。
愛なんて所詮まやかしで、一瞬の快楽に耽ることこそが妖魔の本質だと気がつく前のわたしの言葉。
そのときになってようやくわたしは思い出したのだ。
より完全な妖魔となるために、力の一部とともに幼い感情を封印したことを。
「おまえ・・・わたしなの？」
わたしに聞かれて、その娘はびくっ、と体を震わせた。
なるほど。

わたしはかすかにうなづいた。
どういうはずみか、あのときのわたしの感情が、肉体を持ったらしい。
それなら、わたしに勝っても不思議ではない。基本的にはわたしと同じ能力を持っているのだから。
それにしても。
かつて封印した感情、とはね。
「ねえ、好きって言って」
かつてわたしだった娘は言った。
が、わたしは黙って首を横に振った。
ここでこの娘を認めるのは、わたしの選択が間違っていたというようなものだ。
ただ。
その一言がどんなに言って欲しいか、おそらくこの世の中で一番知っているのはわたしだろう。
「ねえ、言ってよ」
彼女の言葉は、だんだんと子供じみてきていた。わたしと肌を合わせて、愛情に対しての飢えが刺激されたのだろう。
だが、わたしはそんなことを言う気はなかった。
それがいかにも不満そうに、彼女は、もう一度わたしの顔に息を吹き掛けてきた。
けど。
もう、効かない。
どんな技を使ったのかは知らないが、案外効果時間の短いものだったらしい。いまのわたしは、再び魔界の女王に戻っていた。
「なんで？　なんで効かないの？」
彼女の声は、もう泣きそうになっていた。
可哀相に。
素直に思った。
可哀相な娘。そして、可哀相な昔のわたし。
わたしは、素直な気持ちで、彼女にキスをした。
びっくりしたような顔をしてわたしのキスを受け入れると、彼女は、とろん、とした幸せそうな顔になった。
そして。
キスをしながら、彼女の体がだんだんと軽くなっていくのがわかる。

わたしの体の中に吸収されているのだ。
もとはわたしの一部だったものが、わたしの中に帰ってくる。
唇を離すと、リリスはわたしにきゅうっ、と抱きついてきた。
「好き、って言って・・・消えちゃうから・・もう・・」
「駄目だ」
「なんで?」
「その言葉は妖魔の本質に反するし、わたしの主義にも合わない」
「だって・・それじゃ・・わたし・・」
なんのために生まれてきたの?
という言葉が聞こえたような気がした。
まったくそのとおり。なんのために生まれたのか。魂の転成があるわけでもなく、死んでしまえば泡のように消えてしまう妖魔としては、そう思わずにはいられない。
そして、きっと、誰かに覚えていて欲しいにちがいない。
「わたしが覚えていてあげる・・ずっと」
好き、のかわりに言ったのは、その言葉だった。
けれど、それを聞いて、リリスは安心したようにうなづいて。
そして、空気に溶け込むように消えた。
わたしの体の中に、リリスのかけらが入ったのを感じながら、ため息をついた。
愛なんてまやかしなのに。
心の中に、妙な感情が芽生えかけたが、ほたしはそれを無視した。妖魔には必要のない感情だったから。
そして、わたしはなにごともなかったように城へと帰ったのだった。

そして。
いま、わたしは魔界の主の証明たる指輪をながめている。
いままで滅多につけなかった指輪だ。
なに、というわけではないが、どうやらもう一人のわたしはこの指輪がお気に入りらしい。
好き、か。
わたしは、消えてしまったもう一人のわたしのことを思い出しながら、あらためて首を横に振った。
妖魔にはいらないものよね、と。


にゃん にゃん
Hiroyuki Hataike 93.8.11
実はニャキャラ好きじゃないの。デブに見えるから。

ハンターのゆううつ
同やするって とってもきもちの いいことなのよ
。ニハぺたく
夜中のファミレス。
Demy's
じゃあ今度のワンフェスはこれでいきましょう。
そうですな。
ん？
あれ？あそこにいるの…
あっどのうさん!!
……

はぁooo

なんか落ち込んでるよ。

あっ!! これはみなさんお久しぶり。

セィヴァー出れなくて残念でしたね。

ガバ

そうっっ!! それなんですよ!!

じつは私・・・

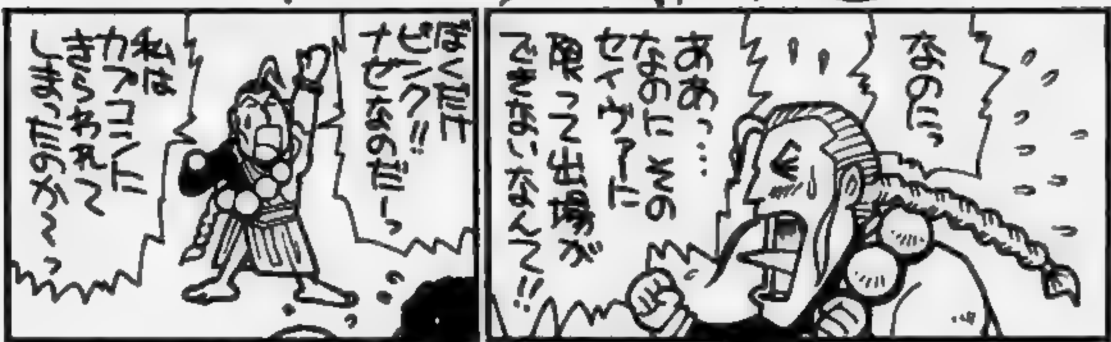
ロリーロリ!!

がうっ

大好きなんです!!

セイヴァーの
新キャラ!!
ないペタ、ねらい
バッチリ!!
スリム少女リリス!!

永遠の少女
赤ずきんちゃん
(エプロンドレス)の
バレッタ!!




じゃ…じゃあ…
かわーりに今度ウチで仕事してみませんか？・


そ…そのゲームに美少女は？・


もちろん
ギャルゲーですから


おおっギャルゲー
あの回転寿司でよりどりみどりでたらいまわしでロリもあり!!


サク


ずるずる
あの…

おわる。

いぶき
ネロ
ク
旦那？…ネロの奴 納屋にいぶきお嬢様を連れ込んでました世
ナニー!?

TREET FIGHTERⅢ

いぶき

ちょっと

どうも！OGAIです!!
ニンジャ娘ッス!!!
服がよく分からないので
うそんくさいですが、大目に
見てやって下さい!!
そんなワケで格闘ゲーが
ド下手なOGAIはPLAYする
人のうしろでながめることにします
そんなかんじです。ラコウッ。

1997.4

とだい出 OGAI

アフリカ娘 ときめき☆香港ツアー



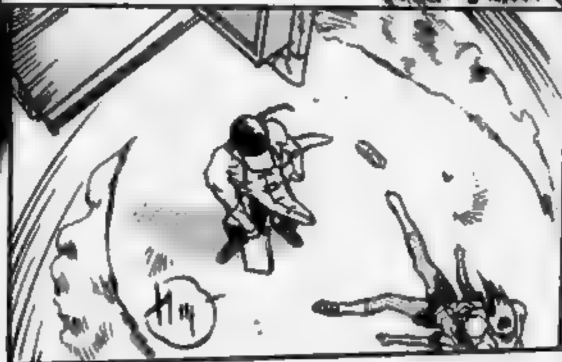

お父さん
私は今、修学旅行で香港に来ています。
一九九七年


エレナ
エレナってはっ








カッ


ゴメーン ゴメーン!!
よけられると思ったんだ。


・・・・


私達友達になれそうっ!


行くぞヤンー!


ちょっ
ちょっと待っ……




虎
撲
子
あー びっくりした。


実は…
私も格闘技やってるのっ!!


勝てると思ってたっ・


ここは人目も多い。場所を移そう。

上海菜館

なぜ俺達に目をつけたっ

俺達の事どこまで知ってるっ

わ、わたしは友達に…

あ

本当の事イっちまえよ。

はぁ

はぁ

あ



へぇ～
ここはきれーなピンク色
してるぜっ！
わー
すっげーえ
愛液の量
だな



どーって…
こんな…









ぴくんっ
あ。
あっあっー
出ちゃうっ…あっ


痛っ…
痛いて!!
イヤァ
けっこうキツイな


んーんむっ
上手じゃない…
甘い
私…
こんな…初めてなのに

締ろびありてるぜ

あはっ

ヤー

ひぁ

あ
あァ…

入って・・・

お尻の穴に

私・・・

あん

気持て、

あっ



もう終わりなの？まだまだ踊りたりないよ！

私たち友だちになれそう！

あなた達もそう思うでしょ


エレナ

いつもの

— あとがき —



みなさん暑い中いかがおすごしでしょうか？今回もなんとか本が出せました。
ところで"ヴァンパイア、セイヴァー"なんだけど、みなさんやってます？ゲーセンでは、もうやってる人みないんですけど

今年はリリスのコスプレいっぱいいるかな〜？

デモに出てくるキャラ（ゴウキみたいな奴）も出ないみたいだし ちょっとスト亜の時のこと思い出しちゃったかな、CP買っちゃったのに……
とりあえずご意見ご感想などその他いろいろおまちしております。よろしくね。 横田。

丹下拳闘倶楽部

25日のワンダーフェスティバルの。
"丹下犬ファクトリー"もよろしくね♡.



FUNKY ANIMAL
~THE. SUPER~

1997 8・15 初版発行
発行所 丹下拳闘倶楽部

印刷所 [illegible]社 様



再下拳闘倶楽部